

# 庄内地方の大地震

庄内地方は江戸時代以降、3回にわたって大被害地震に襲われている。

①文化元年6月4日(1804年7月10日)の象潟地震、M=7.0。震央は象潟付近か? 風光明媚な象潟湖が1~2m隆起して現在では田圃になっている。大被害地域は海岸沿いに、秋田県本荘から山形県鶴岡に達する、庄内藩の死約150、潰家約3,300、潰蔵182以上、寺社潰100。

②天保4年10月26日(1833年1月27日)、震央は温海沖、M=7.5。1965年の新潟地震の震央の北隣に発生した。山形県沿岸の震度はVの強、日本海沿岸各地に津波、庄内での死46人、潰家475、半潰家176、潰土蔵43。

③明治27(1894)年10月22日17時35分ころ(絵図参照)の庄内地震、M=7.0。震央は庄内平野の中心部。この地震では、酒田町を含む飽海郡で焼失家約2,000棟、特に酒田町では1,747棟。全潰家2,150棟、半潰約1,550、破損家5,550棟、死487という大被害。とくに庄内平野の東部山寄りの集落では家屋倒壊率が50%以上の村々が多かった。庄内平野では土地の亀裂や陥没が多く、土砂を噴出した。

①の地震でも同様の液状化現象が見られ、酒田付近では地割れ多く、井戸水が3mも噴出した所もあった。

②の地震では新潟県で水砂噴出したり、草水坪(石油井)で塵埃砂を噴出したものもあった。

さて、絵図は③の庄内地震のときのもので「写所見」あるいは「写生」と記してあって、脳裏に焼き付いた光景を絵にしたものと思われる。火災の様子、焼死者の惨状、さらに震災後の仮小屋(といっても、雨戸などを立て掛けただけの囲い)や、寺社の全半潰の様子が描かれている。

地震の悲惨さは単なる被害統計の数字からは、我々に伝わってこない。こういう絵図や体験記などから、災害にあった人間の生々しい声や行動が伝わってくる。そうして、次の災害への心構えが生まれてくる。こういう点から見ても、この絵図は貴重なものである。絵図から受けた印象は次の

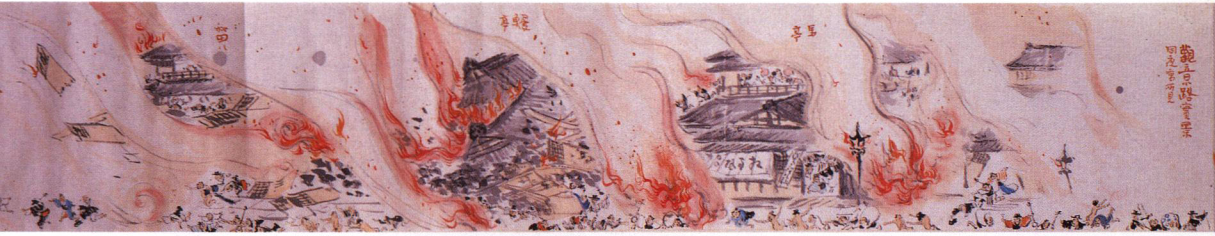
体験談によって強められる。

「……此年地震前後ニ鯉沢山漁セリ、猶亦之ニ引替ヘ山形県飽海郡酒田町ハ同日同時非常ノ大激震ニシテ家屋其他建物倒壊シ、潰傾逐ヒ出火シ大火トナリ七、八百戸ノ焼失、人畜ノ死傷甚タ多シ、地割レ之ニ落陥シ死セシモノモ尠カラズ、且ツ之ト同時土地ノ割レタルヨリ水吹出、其勢イ筆紙ニ到底名状スベカラズ、吹出テタル水ニテ船場町辺ハ四、五尺位ニテ洪水ニ異ナラズ、一方ニ大火亦焼ケ死セルモノモ多数アリ、家具ヲ運搬シ其途次建具杯ハ其吹出ス水ノ勢ヒニテ障子・雨戸ノ如キハ高サ三、四百丈モ飛上リ、半紙ニ枚位ノ鶴紙ノ如シト云フ、実ニ其惨状言語筆紙ニ名状シ難シ、其後兩三年ノ間一日二、三、四回ツゞ弱震アリ、……」

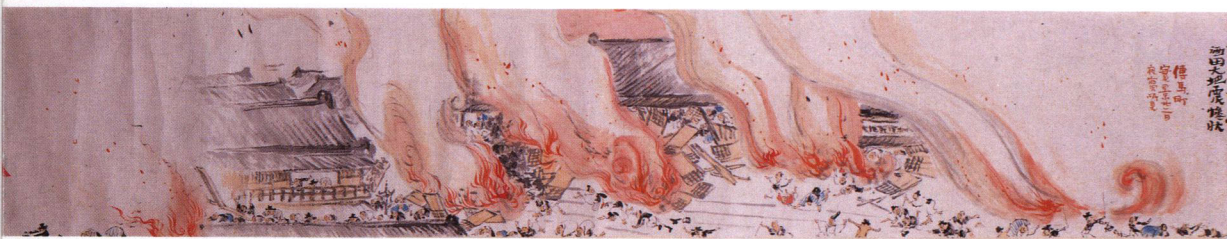
次の文は①の地震のときの酒田における揺れの状況で鑑谷家の文書による。

「……四ツ時過にもやあるらん、海底の鳴りわたる事、大風の浪を逆巻如く一しきり聞こえ、何事にやおもふほどこそあれ、家鳴りゆるきけるにすハ地震そとおもひよりて床所を出んとすれと敷居・鴨居ゆかみあひて障子速やかに明かされハ漸くして洩れ出行、曾祖母の休ミ給ふ処を訪ひ、走りて裏にかけ出ぬれば、ゆるきて立よらぶほどにみな手をくみ合、またハ木にとり付なとして念誦し居けるに地のわれたるひびより水の吹出して所によりてハ地上尺余も上り川の如くなりしと云、頼なく心細きせんかたなし、かくきひしくゆる事およそ、たはこを忒三ふく吹ほとの間、生る心地なし、……」

さて、明治の庄内地震は、和風の木造建築の耐震性に対する注意を促し、その結果被災建物の詳しい調査が行われた。これに基づき翌年には震災予防調査会が木造建物の改良仕様書を発表した。木造建築の欠点として、地形の不完全、屋根の過重、各種継手の不備、洋風建の咀嚼不十分などが挙げられた。



明治27年10月22日酒田大地震惨状／酒田市立図書館（光丘文庫）提供

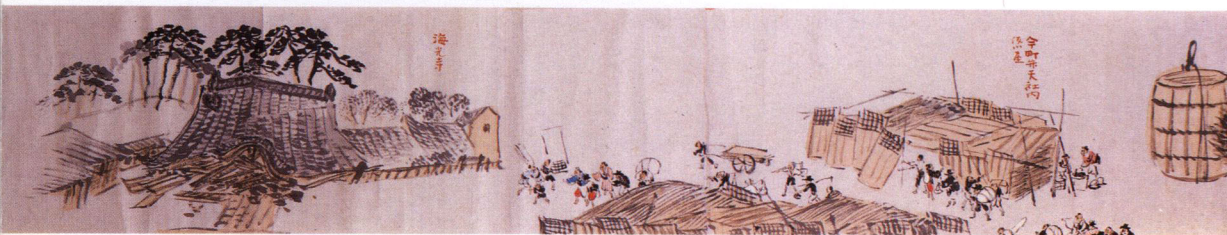


酒田大地震狀  
繪五町  
宮本武吉  
永富時



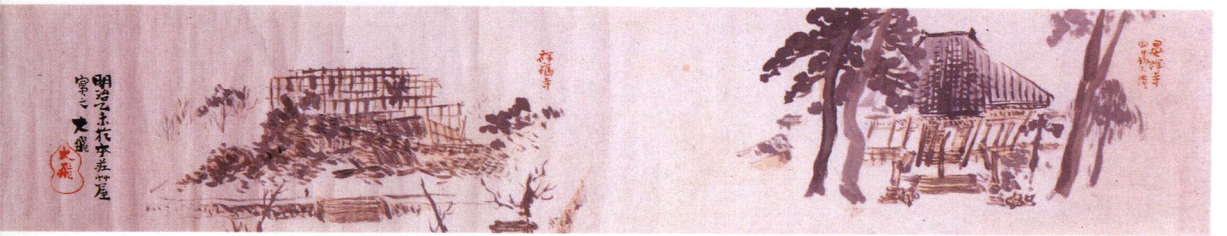
以之北埋所  
宮本武吉

酒田大地震狀  
繪五町  
宮本武吉  
永富時



海王寺

今町天正  
宮本武吉



打福寺

酒田大地震狀  
繪五町  
宮本武吉  
永富時

明治元年花亭並打屋  
宮本武吉